

悪霊 第五部・砂上の王国

悪
霊

第
五
部
・
砂
上
の
王
国

【登場人物】

伊集院満枝	H市の地主の娘
猪俣佐和子	満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事。党員となる
増田小百合	旧姓・安西。伊集院満枝の一年後輩
佳代	貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
喜代美	女工。党に派遣されモスクワに留学
李麗姫	女性抗日バルチザン
小沼健吾	労働運動家。伊集院家の元小作人
三沢	党中央委員
大橋多喜蔵	党員。プロレタリア作家
増田喬	小百合の夫
悦子	家出した少女
五郎	不良少年
加藤寅二郎	脚本家
江戸川	探偵小説家
田中少佐	上海の謀略機関に属する陸軍将校
「清朝の王女」	田中少佐の「愛人」と噂される女性

昭和六年（一九三二）年十一月〜昭和七年一月。東京市、満州、弘前市、上海

V

昭和六年は暮れ、年が開けて昭和七年となった。
満州・大連の外国人居留区では、日本人も含め、盛大に新年の祝賀が繰り広げられたが、陰暦で正月を祝う支那人たちは、息を潜めたように静かだった。

満州事変と呼ばれる関東軍の軍事行動は続いていたが、張学良率いる支那軍は、兵力の温存を優先し、さしたる抵抗すら見せることなく撤退を繰り返している。この大連は、戦火とは無縁であつた。

日本では一月八日、一朝鮮人が皇居の桜田門近くで、天皇の馬車に手榴弾を投げる事件が起こり、警視総監が責任をとって免官となる騒ぎが起こっていた。
「どう思う？」

ヤマトホテルのスイートルーム。朝の湯浴みを終え、白いバスローブをまとい、鏡の前で長く垂らした髪にブラシを当てつつ、伊集院満枝は、ソファで英字新聞を広げる李麗姫に話しかけた。

「愚か、の一言だ」

冷たく言い放つ麗姫に、満枝は眼を丸くしてみせた。

「あなたの同胞の仕業よ」

麗姫は首を振り、かなり上達した日本語で流暢に言った。

「テロは、成功しなければ意味がない。この男のせいで、多くの同志が弾圧を受ける」

「そうね……」

満枝は、麗姫に並んでソファに腰をおろした。

長い腕を伸ばして麗姫の肩を抱く。麗姫は、ゆっくりと満枝の肩に顔を寄せた。その額に唇を押し当て、満枝は囁くように言った。

「あなたなら、どうする？」

「私が？」

「もし、日本の天皇を暗殺するとしたら……」

「そうだな……」

ガウンの胸を押し広げ、満枝の豊かな乳房に頬を押し付けながら、麗姫は言った。

「天皇の生母は、怪しい宗教を信じていると聞いた」

「……そのようね」

舌で乳首を撫でられ、小さく喘ぎながら満枝は言った。

「怪しげな連中が宮城に出入りしているという噂だわ」

「ならば、まず、その宗教団体に入り込む。色仕掛けで教祖を籠絡し、さらに、天皇の生母に取り入る」

麗姫の顔が、満枝の胸乳から腹部へと移動した。その指は、ガウンの裾から内部に滑り込んだ。

「あなたならできるわ」

満枝は眼を閉じ、麗姫の愛撫に身をゆだねながら言った。

「そのようにして……天皇の生母を誑しこむわけね」

「そうだ。宮城に入り込み、隙を見て、天皇の睾丸を潰す」

ソファに仰向けになった満枝の陰部を指で弄びながら、麗姫は続けた。

「天皇だけではない。日本皇室の男は全て、去勢する」

「素晴らしいわ！」

満枝は歓喜の声をあげた。

「皇室全体が去勢されたら……万世一系はそこで途絶える……革命への近道ね」

「そうだ」

麗姫は身を折って満枝の唇に接吻し、言った。

「睾丸は、子孫繁栄の源。それをすべて叩き潰すことが、大日本帝国を滅ぼす最上の策」

その一時間後。

ヤマトホテル近くの川奈産業大連支社の会議室には、支社長をはじめ主だった幹部社員が顔をそろえていた。白いブラウスに黒いスーツを羽織った伊集院満枝が席に列なっていたのは言うまでもない。

「宣統帝は、どうやら長春に向かわれたようです」

幹部の一人が報告した。

「それは、確かなことかね？」

支社長の問いに幹部は頷いた。幹部たちの眼差しが、そつと満枝に注がれた。

宣統帝とは、清朝最後の皇帝である溥儀のこと。辛亥革命で清が滅んだ後も紫禁城に留まっ

ていたが、八年前に追放され、以後は日本の庇護の下、天津で遊び暮らしていた。それが昨年末、関東軍の手引きにより、天津を脱出、以後、満州の奉天に在住している。

満州をほぼ制圧した関東軍は、清朝の遺臣や満州における支那人実力者をかきあつめた委員会を組織し、国民政府からの独立を宣言させた。新しく作られる国の首班には、宣統帝溥儀が推戴されるであろうことは、ほぼ間違いない。

前年九月、満州事変と呼ばれる関東軍の軍事行動が勃発する前から、川奈産業は、満州に新国家が建設されるであろうとの予測のもと、様々な準備を始めていた。新しい国ができるとなると、建国を祝う様々な祝典、新たな庁舎、新たなモニュメント、新たに起こる産業、細かくは、新たな国旗、新たな国軍の軍服、礼服……。商売のタネはいくらでも転がっている。その利権にいち早く食い込むためには、事変を動かしている「実力者たち」からの情報が欠かせない。

その情報網を作り上げたのが、伊集院満枝であることを知らぬ社員はいない。

新国家建設が秒読みに入った今、もつとも関心を集めているのは、どこに首都が置かれるかであった。大陸の玄関と呼ばれた大都市・大連、人口だけなら大連を凌ぐ奉天など、候補は多い。

ただ、伊集院満枝のみが「長春になるのではないかしら」と呟いた。幹部社員たちは口々に否定した。長春は、交通の要衝として重要視されているが、大連や奉天といった大都市に比べると、寂れた僻地にすぎない。

「だからこそ長春なんです」と満枝は主張した。現在、日本国内は長引く不景気に喘いでいる。更地に等しい場所に首都を築くとなれば、既存の大都市を選ぶより、多くの利権が生まれる。日本国内の経済人はこぞって新国家建国を支持するだろう。

それでも疑問視する幹部社員は多かったが、どうやら、満枝の見通しの確かさが、またもや明らかになった形であった。

「しかしね、君……」

幹部たちがざわめくなか、肥満した支社長は、額の汗をぬぐいながら言った。

「アメリカは、今回の関東軍の軍事行動を承認しないと云っている。欧州各国も同調の構えだ。果たして、新国家建設など認められますかね？」

「そうですね」

一人の幹部が同調した。

「もし、欧米列強の承認が得られなければ、政府としてもこれ以上、関東軍の行動を座視してはおれませんまい。もし、政府が関東軍の意向に反して新国家建国に反対となれば、新たな首都建設どころではない。わが社としても、これまで注ぎ込んだ投資が一気に無駄になってしまう」

経営にずかずかと踏み込んでくる小娘に反感を抱く幹部社員が一斉に頷き、残る幹部たちは、支社長と満枝の顔をそつと見比べるばかりだった。しばし、会議の席を沈黙が支配した。

満枝は、ゆっくりと口を開いた。

「関東軍は、欧米各国の眼を逸らすために、どこかで事件を起こすかもしれませんね」

「事件？」

「ええ……。欧米各国が無視できないような場所で」

幹部たちが顔を見合わせた。満枝は静かに付け加えた。

「そのことも考慮して、方針を立てたほうがよろしいかと存じます」

その二時間後。

ヤマトホテルのスイートルームに、増田喬が呼ばれた。

「奥様はお元気？」

入ってきた増田に、まず満枝は問うた。

「しようもない奴で」

増田は苦笑いして言った。

「今年の新年会にはこちらに来るようにと言ったんですが、やはり外地は怖い、と」

満枝は小さくため息をついた。

彼女が怖がつているのは、ここが外国だからでも、戦地だからでもあるまい。

ほかならぬ自分を怖れているのだ……。

「申し訳ないわ」

満枝は、増田に向かって頭を下げた。

「帰国させてあげたいのだけれど、今は経営拡大の絶好の機会だし、優秀なあなたには、ここに留まっていたただかなくては」

増田は、いえいえ、と謙遜しつつ頭を下げた。

「今が、川奈産業にとって正念場であることは、重々、承知しておりますので」

ここに来た頃とはずいぶん変わった……。満枝は、好ましげに増田を見た。いくつも功績をあげ、態度も堂々としている。

「すぐに、上海しやんはいに飛んでほしいの？」

「上海？」

「ええ。そこで、この人に会ってください」

一枚の写真を取り出し、増田に手渡した。軍服を着込んだ断髪の女が写っている。

「この女性は……？」

「あなたも名前くらいはご存知でしょう」

「あ、はい……」

増田は口ごもった。

滅んだ清朝の王女。今はある日本人の養女となったが、突然髪の毛を切って男装したり、同級生の少女を「愛人」と称して連れ歩いたり、自殺未遂事件を起こして新聞のゴシップ欄を賑わせたこともある。

その「王女」と、満枝が旧知の仲なのか……。

「昨年の暮れに満州にいらした時にお目にかかったの」

満枝は、当惑する増田の心中を見透かしたように言った。

「それで、この女性と会って、どうするんです？」

「彼女は今、上海にある日本公使館付武官の田中少佐の愛人と噂されています」

「はあ……」

「これは予感だけど、上海で何かが起こるわ」

話が飲み込めぬ様子の増田に、満枝は悪戯いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「彼女に近づいて、上海で日本軍が何かたくらんでいないか、確かめてちょうだい」

東洋のバリ。魔都。

当時の上海に冠せられた形容詞である。イギリスやフランスをはじめ、欧米各国の租界が形成され、極東に於ける金融ビジネスの中心地となっていた。国際金融の錬金術で生み出された金は、夜の世界に流れ込み、街じゅうに煌々ネオンサインが眠りにつくことはない。

「日本も一等国だなんて威張ってるが、上海に来たら認識が変わったんじゃないか」
髪を毛を七三にわけてポマードで固め、黒のタキシードを着た「清朝の王女」は、煙草をくゆらしながら言った。

「ホテルから日本に電話をかけてみたまえ。ここじゃ、ダイヤルを回すだけで国際電話がつながる。いちいち、交換手に頼む必要がないんだ」

言葉遣いまで男性そのものだった。増田喬は、はあ、と頷きつつ、周りを見回した。

ホテルのダンス・ホールは、まさに人種の坩堝だった。ダンサーの大部分は支那人女性のようにだが、日本人らしき女性も少なくない。金髪の女性もいる。やかましくジャズを奏する二十名ばかりの男たちは、アメリカの黒人だろうか。

昨日、上海に到着した増田は、ホテルから「王女」の住んでいるアパートに電報を打った。すぐに返事が来た。ダンスホールを会合場所に指定され、面食らった。しかも、二人きりで食事をしようというのだ。

「君は、こういう場所には不慣れと見えるね」

今年二十五歳になる「王女」は、手を伸ばし、増田の肩を叩いて哄笑した。増田は苦笑いした。

挙措動作は男性らしく作っているが、小柄で、手の力の弱さは明らかに女性のものだ。

「で、伊集院嬢は元気なのかね」

「ええ」

「彼女はね」

「王女」はにやにやしながら、増田に顔を近づけた。

「久しぶりに、僕を女性に戻してくれたんだよ」

その意味をはかりかね、眼をしばたかせる増田に、「王女」は再び哄笑した。

「君は純朴だね……気に入ったよ」

ボーイを呼び、新たなカクテルを頼んだ「王女」は、ふと、ホールの隅に眼をやって舌打ちした。

……余計な奴が来やがった。

そのつぶやきに、「王女」の眼差しの先をうかがうと、頭を剃り上げ帝国陸軍のコートを着た男が、人波をかきわけつつ、人を探している風情できよろきよろしている。

肩章を見ると少佐らしい。増田も満州に来てから軍人との付き合いも増え、肩章を見れば階級がわかるくらいにはなっていた。

「王女」の面差しからして、知り合いのようだ。ひよっとすると、彼女の愛人と噂されている田中少佐だろうか。

「君、すまんが、店を変えよう」

「王女」は立ち上がり、大股に出口へと向かった。増田は慌ててその後を追った。ホテルの玄関でタクシイを拾い、支那語で運転手に何かを命じた。

「さっきの軍人は……」

車が動き出した後、「王女」は右眼をつぶってみせた。

「僕の金づる、なんだよ」

「金づる……ですか？」

「ああ。あいつは金で僕を囲っているつもりらしいんだが、少佐ごときが、僕のような金遣いの荒い人間を養えるはずがない。どうせ軍の機密費をつかっているんだろう。僕はその見返りに、いろいろと日本軍に協力してあげているのさ」

「では、何か大切な用事ではなかったんですか？」

「どうせお説教さ。清国の王女様ともあろう者が、ダンスホールに出入りなど外聞が悪い、なんてね。自分は、清国の王女様を妾にしたとあちこちで自慢しているくせに」

あまりにあげつるげな「王女」の言葉に、若い増田は眼を伏せるしかなかった。「王女」は肩をゆすつて哄笑した。

「君、誤解しないでくれよ。僕はあの男と寝たことは一度もない。第一、僕はね……」

ふと笑みをおさめ、「王女」は車窓の外に眼をやって呟いた。

「大の男嫌いなんだ」

タクシイが着いたところは、竜宮城のような、けばけばしいつくりの中華料理店だった。「王女」は顔なじみらしく、城門のような玄関に入ると、店長らしい男が出てきてしきりにお辞儀を

する。案内されたのは、薄暗い明かりが灯された個室だった。

「それで……」

象牙の箸で前菜をつまみながら、「王女」は問うた。

「君はなんのために、満州からわざわざ上海に来たんだい？」

「ええ」

増田は、膝に手を載せてかしくまった。

「実は、上海の情勢について、いろいろと伺いたいです」

「情勢ねえ……」

「王女」はにやにやしながら言った。

「この地で日本軍が何かやらかして、欧米の眼を満州からそらす……それが満枝嬢の読みつけてわけかい？」

返答できない増田に、「王女」は続けた。

「確かに、ここは満州と違って欧州各国の利権が錯綜してるからね。軍事行動を起こせば、欧米は黙っちゃいないだろうさ。そして戦争が起これば、そこでまた利権が生まれる。うまくやれば川奈産業は大儲け、どうせそういう算段なんだろう」

君は正直な男だ。「王女」は紹興酒に口をつけ、微笑んだ。思っていることがすぐ顔に出る。何もいえないということは、返事はイエスということだね。

「そうです」

意を決して増田は答えた。

「じゃあ、急いだほうがいい」
「……と言いますと？」

「先日、東京で朝鮮人が天皇陛下に爆弾を投げつけたらどう？」
「ええ」

「こっちの支那字新聞に、その朝鮮人を褒め称える記事が掲載されてから、日本人居留民の間に支那撃つべしの声が高まっている。満州で関東軍が行動を起こす直前に、陸軍将校が殺害される事件があった」

「……………」

「同じことが、おそらく上海でも起きるだろうさ」

「それは……どの程度確かなことなんでしょうか？」

「さあね」

「王女」は大きな眼をくるりと回してみせた。

「さっきも言ったとおり、僕はこの地で日本軍に協力している身だぜ。初めて会った民間人に事の真相をべらべら喋るわけにゃいかんじゃないか」

「それはそうですが……」

「君が、満枝嬢の使者だから、こうして会ってあげているが、これ以上は言えないね」

そんなことより……。 「王女」は身を乗り出した。

「君は、満枝嬢をどう思う？」

「え？」

増田は困惑した。

「そうですね……まだお若いのに、とても賢くて、実業家としての手腕もおありで……」

「美しいひとだよな」

「あ、はい……」

「彼女に、欲情したことはあるかい？」

「まさか！」

増田は激しく首を振った。

「僕は、あるよ」

「王女」は、両手の肘を卓につき、手を組み合わせ、その上に顎を乗せながら言った。

「さっき言っただろう？ 満枝嬢は、僕に女であることを思い出させてくれたって」

「王女」の身の上話は、長々と続いた。

清朝滅亡後、各地を転々とし、やがて大陸で暗躍した日本人国士の養女となった。養父からは日本式の教育を仕込まれた。

「養父はよくこう言っていたよ。日本人はアジアの指導的民族でなければならぬ。そのためにはまず、漢民族に支配された祖国・満州を独立させ、満州人の手に取り戻さなければならぬ。養父を尊敬していた。いずれは満州独立のため、女ながらも戦いたい、とね」

ふと、「王女」は言葉を切り、小さくため息をついて言った。

「その養父に犯された時の悲しみは、君にはわかるかね？」

「え……」

増田は、口に運ぼうとしていたグラスを卓に戻した。

「そう、十六の時だった。養父の講演のお供をして、鳴子温泉に行った。その日の夜、旅館で寝ていたら、養父が部屋に入ってきた」

「……………」

「悲しかった、なんてもんじゃない。裏切られた思いだった」

かなり酔いが回ってきたのだろう。「王女」の面差しからは笑みが消え、からだは前後左右にしきりと揺れていた。

「しよせん、養父は僕を女としてしか見ていなかった。養父は言ったよ。満州王族の血に、日本のサムライの血を混ぜたいのだ、と。それが嘘であることは、幼かった僕にもすぐ分かった。養父は、僕の女の部分に欲情していただけなんだ。僕は絶望した。女である我が身をのろい、髪を切った」

増田は無言で紹興酒をあおった。潔癖すぎる彼には、聞くだけで辛い話ばかりだった。

「満州で満枝嬢に会ったとき、僕はそのことを話した。包み隠さず話した。満枝嬢はそれに対してなんと言ったと思う？」

「さあ……」

「そういう時には……………」

「王女」は喉を鳴らして笑った。

「相手のきんたまを蹴ってやるんだとさ」

増田は驚いて「王女」を見つめた。「王女」は続けた。

「あるいは、掴んで握り潰してもいい。彼女はそう言ってたぜ。どう思う？」

「なにをです？」

「男のきんたまを蹴り潰し、握り潰す。そんなことを平気で言う女に任つかえるのは、どんな気分かと聞いているんだよ」

思考が働かなかった。紹興酒の酔いのせいばかりではない。無言の増田を一瞥し、「王女」は言った。

「僕はびっくりした。そんなこと、考えたこともなかったからね。満枝嬢によると、きんたまを潰してやると、どんな傲慢な男でも、おとなしく従順になり、なんでも素直に言うことをきくんだそうだ」

「……………」

「そんなことを言うところを見ると、満枝嬢、男のきんたまを潰した経験があるんだろうなあ」

「やめてください」

増田は不機嫌に言い放った。

「あの方は、僕の恩人なんです。大変な就職難の時期に、僕は、妻の先輩である伊集院さんの推薦で川奈産業に入った。伊集院さん選ばれて、満州の支店に赴任し、いま、重要な仕事をやらせていただいているんです。伊集院さんを侮辱するのはやめてください」

「おや、僕がいつ満枝嬢を侮辱したね」

真顔で、「王女」は言い返した。

「君には分からないだろうね。慕っていた養父から犯される時の恐怖、処女を奪われる時の苦痛、ことが終わった後の屈辱感……」

「……………」

「僕は三年前、蒙古人と結婚した。その家では、花嫁が処女であることの証に、初夜の折に使った敷布を家族全員に見せなければならぬのだよ。だが、僕は拒絶した。夫は、僕が処女でないことを知って以来、よそに女を作り、僕を抱こうとはしなかった」

「王女」の面差しから怒りの色が消え、自嘲にも似た冷たい光が宿った。

「あの時期、僕は男装をやめ、髪を伸ばし、必死に家事をこなした。それでも、処女でなかった僕を、彼らは家族の一員とは認めなかった。結局、三年たらずで追い出された」

「……………」

「犯されそうになった時、養父のきんたまを蹴っていたら、僕の人生は違っていたはずなんだ」その四文字が、男装はしていても女らしい容貌风采の「王女」から発せられる度に、増田はいたたまれない思いだった。

「お辛かっただろうと、お察しします。しかし……」

増田は、静かな声で口を挟んだ。

「そういう言葉を使われることは、あなたご自身を卑しくするばかりです」

口を噤んで、「王女」は増田を見つめた。瞳孔がかすかに揺れていた。ゆっくりと、「王女」は口を開いた。

「君は、結婚しているのか」

はい、と頷く増田に、「王女」は呟いた。

「君の奥さんは、さぞ幸せなのだろうな」

その翌日。

増田喬が眼を覚ますと、彼は硬いソファの上で、毛布にくるまっていた。昨夜、したたかに呑んだ紹興酒の酔いが残っていて、頭が痛い。

重いからだを起こして、しばらく俯き、意識が晴れてくるのを待った。

そう。「清朝の王女」とダンスホールで落ち合い、それから中華料理店へ。その後は、英国租界のバアで呑み直し、タクシーを拾ったところまでは覚えていたが……。

頭をあげて室内を見回した。ペルシャ絨毯を敷きつめた洋室だった。天蓋つきのベッドに敷いたシーツが乱れている。先ほどまで、誰かがそこで寝ていたようだ。

そうだった……。

バアを出た後、増田は「王女」のアパートまで連れてこられた。そこでさらに酒を出された。

「王女」は、一人の少女と同居していた。日本人と支那人の孤児で、「王女」は彼女らを「僕の妻たちだ」と紹介したのだった……。

不意に、部屋の外から、ドアを叩く音が響いた。玄関に客が来たらしい。

いるかね、入るぞ。濁声だみごえの日本語だった。

どすんと部屋のドアが開き、男が入ってきた。頭を丸坊主にした背広姿、いかつい顔つきに見覚えがあった。

「誰だ、君は！」

入ってくるなり、男は怒鳴った。狼狽していると、別のドアが開いて、ガウンを羽織った「王女」が、田中さん、大きな声を出さないうで、と駆け込んできた。

田中さん……？

増田は、あつと喉の奥で叫んだ。昨夜、ダンスホールで「王女」を探していたらしい軍人だった。では、この男が、「王女」の愛人と噂される上海公使館付武官の田中少佐か。

「……どういことだね」

田中少佐は、唇を曲げて「王女」を睨んだ。

「この大切な時期に、ダンスホールに入りびたり、しかも、こんな若い男を連れ込んで……少しは、自分をわきままえなさい」

「自分をわきまえるのなら、君こそ、そうしてほしいね。たかが陸軍少佐のくせに、いやしくも王族たる僕に、立ったまま大声を出すとは、無礼だろ！」

怯まず言い返す「王女」に、田中少佐はたじろいだ。「王女」は、立ちつくす増田を一瞥して言った。

「この方は、大連からいらした、僕の大事なお客様だ。まず、非礼をわびたまえ」

「大連？」

田中少佐は、軍人らしい眼光で増田を睨んだ。

「ええ……」

増田は、口ごもりつつ言った。

「川奈産業の社員です。上役の命で参上しました」

川奈産業……。その名を思い出そうとするようにいったん口を噤んだ田中少佐は、上海に何の用だ、と問うた。

「答える必要はないわ」

「王女」は、増田と田中少佐の間に割って入った。

「増田さん、引き留めてしまってくださいまなかつたね。伊集院嬢によろしく」

増田は、睨み合う二人に一礼し、逃げるように「王女」のアパートを去った。

その数時間後。

上海駐在日本公使館の一室で、田中少佐は書類に眼を通していた。

ドアがノックされた。顔をあげると、「館林大尉、入ります」と声がする。腹心の声に、田中はすかさず、入れ、と応えた。

「あの王女だが……」

田中少佐は、軍靴を鳴らして入ってきて拳手の礼をし、机を挟んで佇立する大尉に、顎をあげて言った。

「信用できん」

洗面を作って少佐は続けた。

「あちこちで、われわれに協力して動いてると言いつらしているらしい。このままだと、例の計画が外に漏れてしまう恐れがある。今後は、われわれだけでやる」

「は」

「すべて決着したら、あの女に手柄顔だけはさせてやるさ……。実は、すでに内地の雑誌社に話を通して、すべて片づいたら、あの女をモデルにした小説が発表される手はずになっている。男装のお姫様の一大冒險活劇だ。さぞ、話題になるだろう。そして、われわれの工作の煙幕になっ
てくれるというわけだ」

小さく頷く大尉に、田中少佐は声を潜めて言った。

「で、標的だが、坊主どもの他に、もう一人増やそう」

「もう一人？」

「うむ……」

少佐は渋面を作って言った。

「あの女、どうやらその男に、計画を漏らしたようなのだ」

「なんですか？」

大尉は眉根を擧めた。少佐は手を挙げて制し、言った。

「監視はつけているが、安心できん。事故に見せかけて、口を封じたい」

「それで……」

館林大尉は問うた。

「新たな標的とは誰ですか？」

……それから数日後の一月十八日。

上海に在住する日本人僧侶が、支那人と見られる男に襲撃され、死亡。地元警察の投げやりな

対応に、上海の日本人居留民の間で怒りが渦巻き、その報復として日本人青年の一団が、襲撃現場近くにあった支那人経営の会社に殴り込み、乱暴狼藉を働いた。その十日後、上海で日本軍と支那軍は衝突、いわゆる上海事変が勃発する。

戦闘は一ヶ月半にわたり、軍民合わせて二万余が命を落とした。現地に多くの利権を持つ欧米諸国の耳目は、満州から上海へと移り、関東軍は目論見どおり、着々と新国家建設に邁進する。

連日続く激戦が新聞記事をにぎわせる最中に起こった、ある事件について、誰も気に留めることはなかった。

戦闘が始まった翌日、上海市内を流れる黄浦江で、日本人青年の水死体が発見された。多量のアルコールを呑んでおり、事故死として処理され、新聞で報道されることもなかった。

川奈産業大連支店の一室で、伊集院満枝は、呆然と立ち尽くしていた。

手には、増田喬の死を伝える電報が握られている。

なぜ……。

脳裡に、増田小百合の白い顔が浮かんだ。

小百合が東京に行き、与太者に食い物にされそうになっていた家出少女を助けたことは、増田喬から聞いていた。無口で、一見おとなしいが、強い意志を秘めた彼女らしい……。増田は、そんな小百合を慈しんでいる。口ぶりから、そう感じられた。

その小百合から、満枝は結果的に、夫を奪ったのだ。

生涯、自分を許さないだろう……。

(第五部・了)